

図書館利用時間:平日(開校日)午前9時~午後4時

6月の「読書会」は、6月11日(木)13時30分からです。

今月は、5月の読書会で話し合われた絵本をご紹介します。

『おおきな木』(原題『The Giving Tree』) アメリカ人男性の絵本作家シェル・シルヴァスタイン (Shel Silverstein, 1930-1999) によって書かれた本です。翻訳は、本田錦一郎 (英米文学研究者・翻訳者 1926-2007) と、皆様ご存じの村上春樹の二人です。34年間の時期を違えて翻訳・出版しています。

『おおきな木』



著者:本田錦一郎
出版社:篠崎書林

一つの本を二人以上が翻訳するというのではないことではありませんが、絵本で文章が短く分かりやすい英語だったため、訳者二人の日本語を比較することによって翻訳の妙を考える良い機会となりました。

例えば、原文にある「happy」を本田錦一郎は「うれしい」と訳し、村上春樹は「しあわせ」と訳します。さて、どちらがしっくりくるかは、悩むところです。

以下、簡単に内容を紹介します。大きなリンゴの木と一人の少年がいます。お互いに大好きで一緒に遊んでいます。木は、葉っぱを与えて少年はそれで冠を作ります。かくれんぼをし、枝でブランコもします。お腹がすいた少年に木はリンゴを与えます。

やがて時が過ぎ、久しぶりにやって来た少年が「お金がほしい」と頼み、木は「私のリンゴを売りお金に替えなさい」と言う。また時が過ぎ、少年がやってきて「家が欲しい」と頼む。木は、「私の枝で家を建てなさい」と言い、少年はすべての枝を切って持って行く。また時が過ぎ、中年になった少年がやって来て「遠くへ行きたいが船がない」と言う。木は「私の幹を切って船を作りなさい」と言い、少年は幹を切り倒し運んで行ってしまふ。そして、またまた時が過ぎ、すっかり老人になってしまったあの少年が再び来て言う。「もう、疲れ果てて何もできない。ただ休みたい」木は、「私の株で休みなさい」と言い、少年は残っている切株に腰かけて休む。

The tree was happy. 終わり

以上、簡単なあらすじです。どのように読むかは、人それぞれです。与え続ける木に、母親の子供に対するような無償の(見返りを求めない)愛を感じるという人もいれば、どう考えても少年に感謝の心が湧いてこないのが救われない、という人もいます。せめて最後に、木の切株から小さな芽が出てきて終わるべきじゃないかという人もいます。本当に、いろいろです。シンプルなイラストと共に短い文章があり、1分で読めます。ぜひ、図書館へ足を運んで、絵本を手にとって読み比べてください。英語付きも含めて3冊あります。

新刊本一部紹介

書名	著者	出版社	一口コメント
つなぎごはん	新谷友里江	誠文堂	晩御飯までの時間をつなぎごはん
おまあ推理帖	諸田玲子	文藝春秋	日本版ミスマープル登場
イン・ザ・メガチャーチ	朝井リョウ	日本経済新聞社	2026年本屋大賞
日は植物	いとうせいこう	マガジンハウス	植物とのくらしで一喜一憂する
うかたま 手づくりの発酵おやつ		農文協	甘酒・酒粕・塩こうじでおやつ
本なら売るほど 1・2・3巻	児島 青	KADOKAWA	本の豆知識
葉っぱでかおりのラッピング		農文協	葉っぱを使った食べ物の包み方
だれのせい?	ダビデ・カリ	green seed books	何度見ても見飽きない絵本

リクエスト本は随時受け付けております。